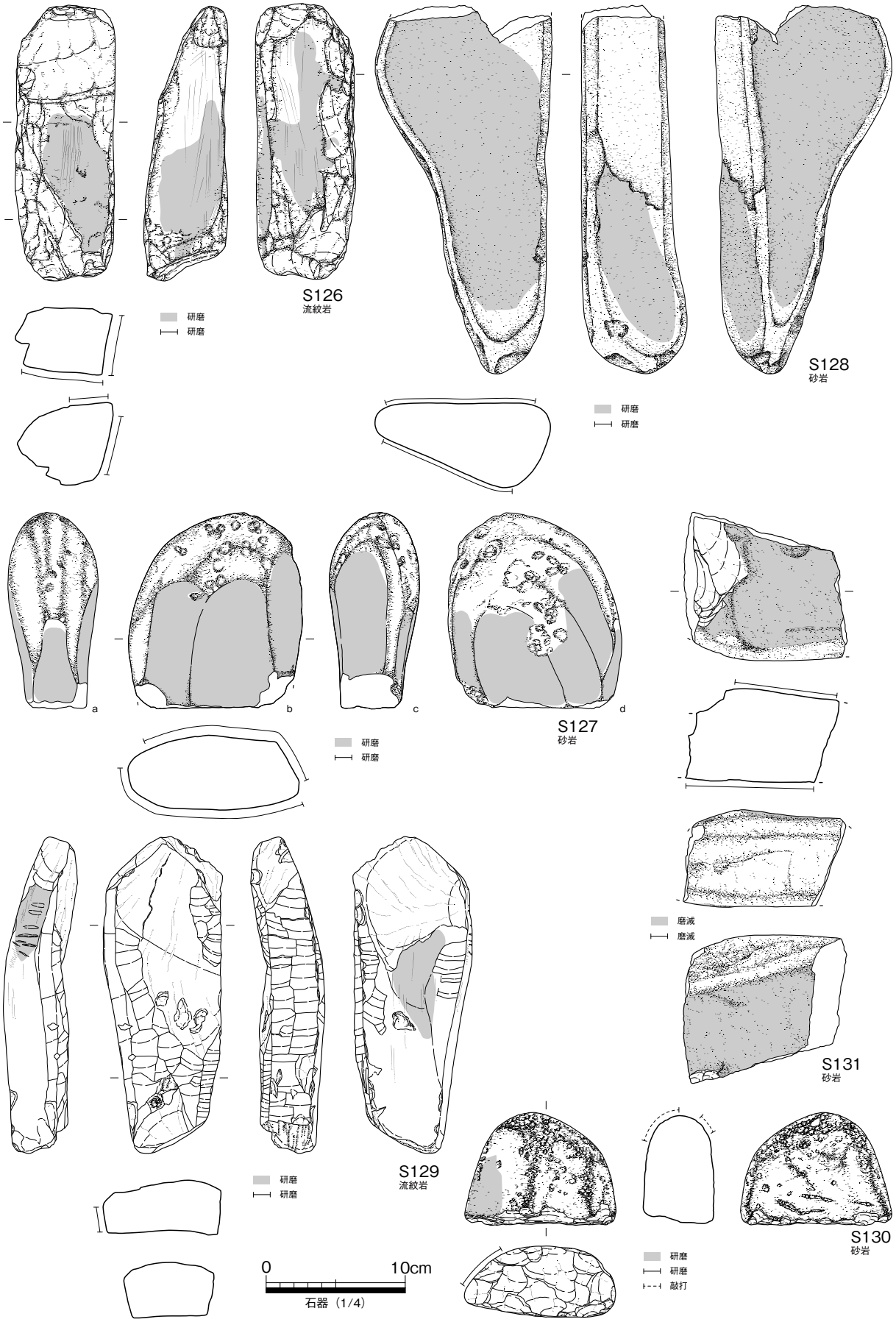


第 161 図　竪穴建物 SH4016a 出土遺物実測図 4

（70）SH4025a

4 区北西で検出した突出部付の方形竪穴建物である。後期前半の竪穴建物 SH4100b を切る。西側は撹乱で滅失し突出部は東北側に付く。主柱穴は 2 基（SP4129a・SP4131a）で間に浅い中央土坑 SK4132a を挟む。推定床面積は 13.0㎡。

床面よりガラス玉、磨製伐採用石斧の再加工品が出土した。

＜出土遺物＞

1236・1237 は拡張した口縁部が大きく開き凹線文を施文する壺で後期前半を下限とする。1238 は後期前半新段階を上限とする口縁部が屈曲する鉢である。胎土 H である。1239 は安定した平底の底部で後期前半を下限とする。S132 はサヌカイト製の楔状石核で打製石庖丁を素材とする。

S133 は安山岩製の太形蛤刃石斧の再加工品だが、側縁はこのサイズですでに刃部に向かって収束しており、本来完成品であったかどうか疑わしい。また半深成岩を主体とする伝統的な石材選択からも逸脱しており、異質である。

T35 は青緑色の酸化カリウムが多い組成のカリガラスを素材とするガラス製小玉である。

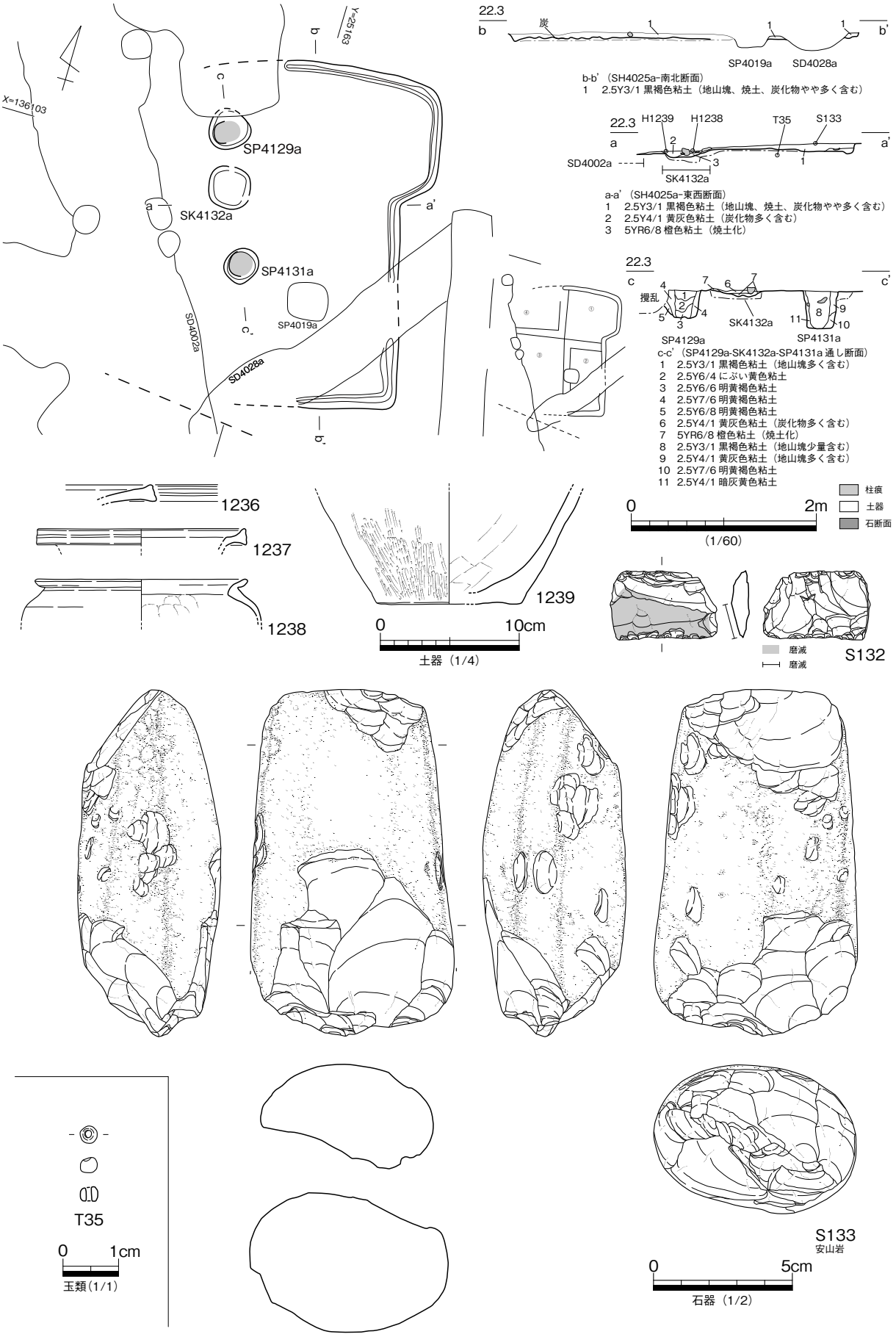
突出部付建物は後期前半からすでに出現していることから、本建物に違和感はないが方形建物は本遺跡内では少数派である。保育所調査区で 1 棟出土したほか、可能性ある断片がみられるに過ぎない。建物の時期は後期前半新段階と考えられ、安山岩を選択した伐採石斧は伝統的な石材選択を了知しない製作事情もうかがえる。

（71）SH4063a

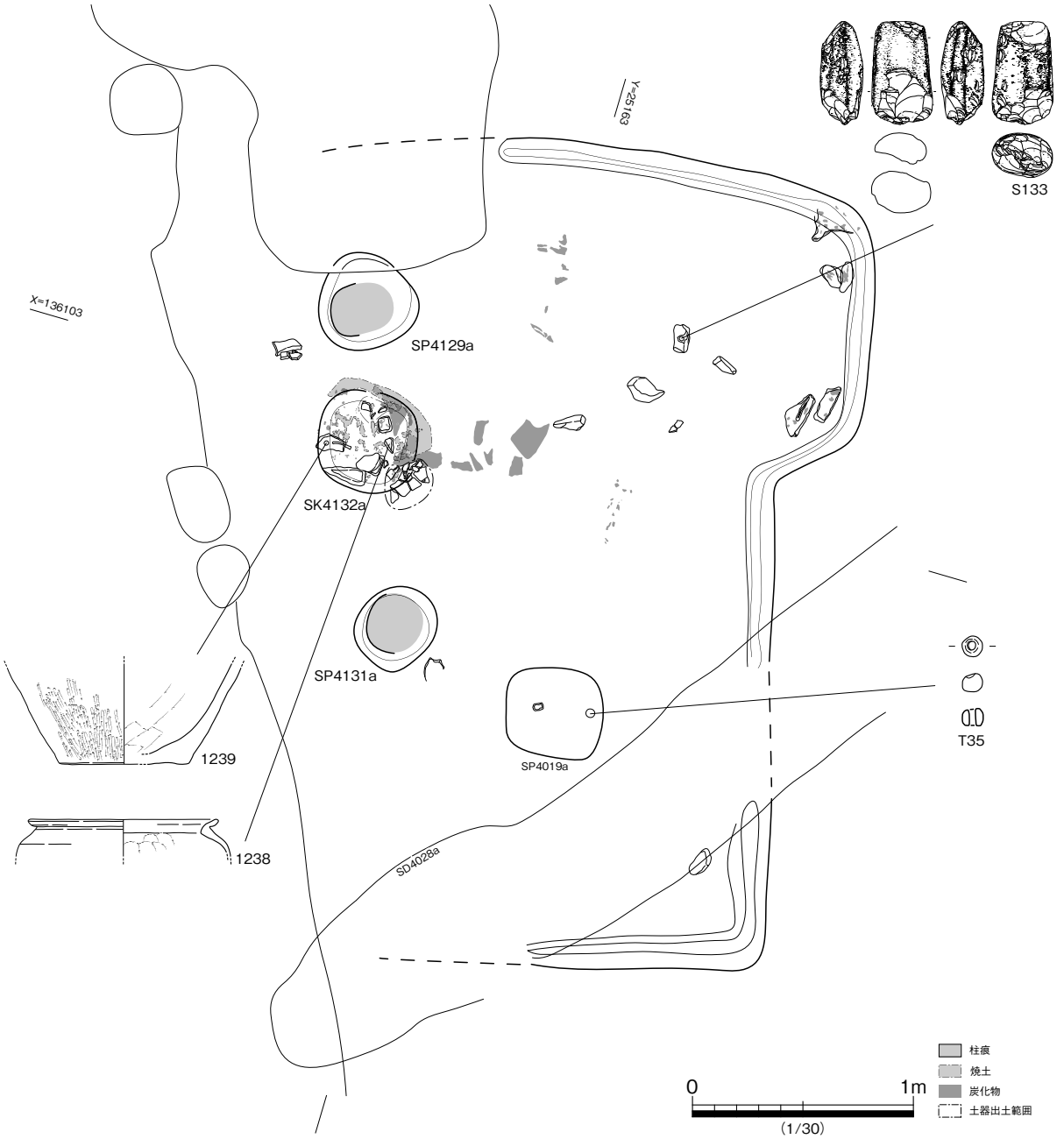
4 区南西で検出した楕円形の竪穴建物である。南と西を中世溝や近代の撹乱で滅失する。残部で重複する竪穴建物はない。推定床面積は 26.9㎡。主柱穴は 5 基と想定され、そのうち 4 基（SP4144a・SP4158a・SP4147a・SP4145a）を検出した。中央には南北に長い楕円形の中央土坑 SK4133a がある。深さは 0.15 m で埋土中に炭化物層が複数入る。土坑周囲には幅約 0.2 m、高さ 0.05 m の土堤状の高まりがある。西側の一部ではその高まりが約 0.2 m の間で浅く途切れる。炭化物層は a ライン断面では土堤状高まりの外側にも広がる。

主柱穴列の外側には貼床によるベッド状遺構を構築する。貼床の厚さは 0.13 m と厚い。壁面際には壁溝が巡る。ただ、貼床を除去した段階で東壁面のやや内側に小溝が、そして北側に突出部状の小溝を確認した。この小溝の性格は建て替えで埋没した主柱穴を共有する古期建物の床面に伴う可能性もあるが、ベッド状遺構上面の建物廃絶時の遺物分布（第 166 図）では突出部状の小溝に対応してその内側に土器片が分布する状況が認められる。したがって、建物廃絶にこの小溝に関わる上部構造が存在したと想定するのが記録データからみると妥当である。また東面の小溝においても a ライン断面の壁際の土層に顕著な凹凸が細かく表現されており、小溝位置で上部に構造物が存在した可能性が否定できない。材料は少ないものの、以上のデータから北側突出部状の小溝はベッド状遺構上部に突き出た間仕切り板を、東側はベッド状遺構の東端部における幅約 0.3 m の小段を想定しておきたい。

なお、廃絶時には主柱穴を抜き取った形跡はなく、壁板も a ライン 5 層のように部分的に板痕が確認できることから、基本的には抜き取りを行っていないものと考えられる。埋土には基盤土ブロックや小土器片が多く含まれることから、周堤の構成土で比較的短時間で埋め戻し整地が行われたものと推察する。



第 162 図　竪穴建物 SH4025a 平・断面図　出土遺物実測図

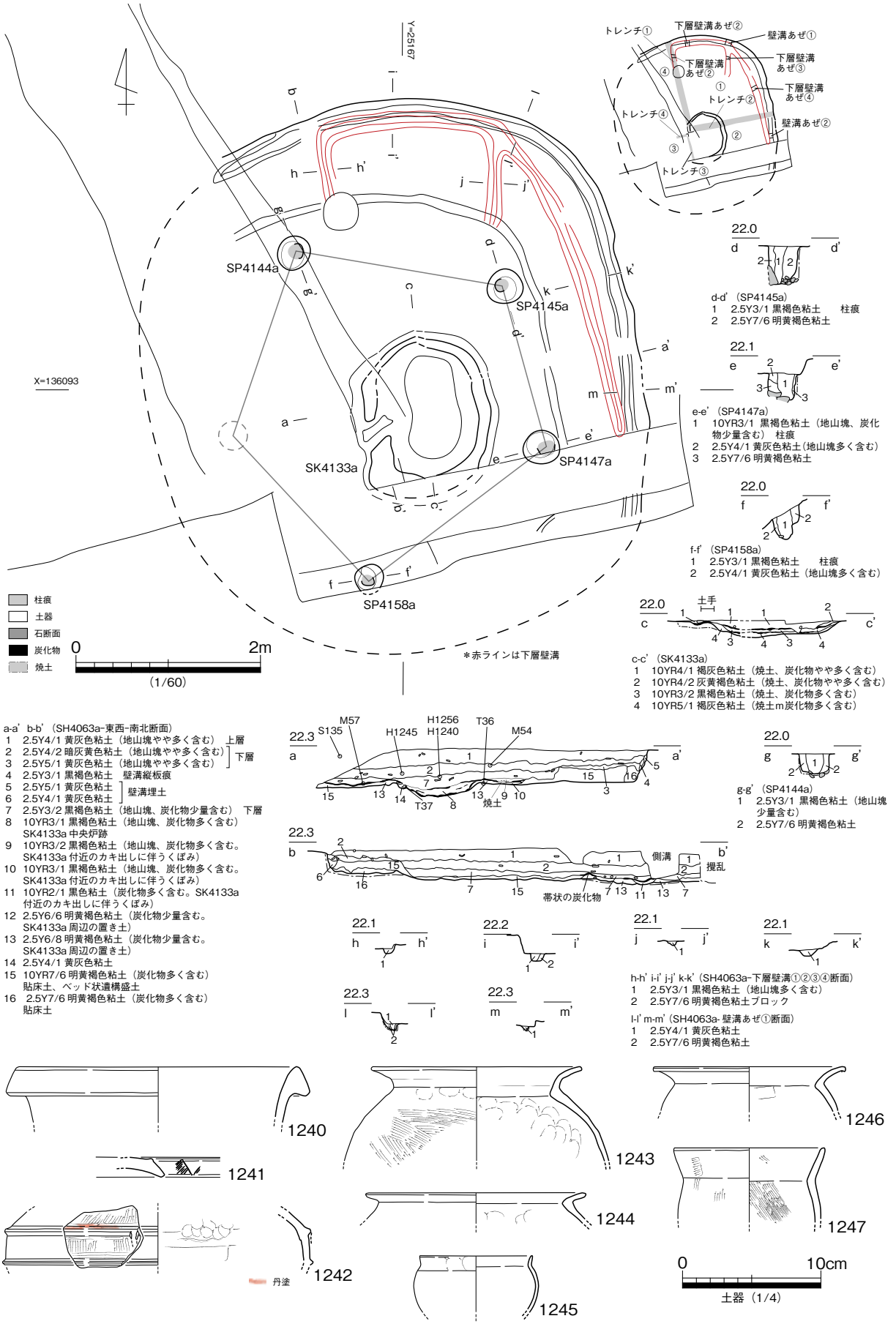


第 163 図　竪穴建物 SH4025a 出土状況図

中央土坑及び床面出土の 3.5 g の炭化物中からはコナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属の材が同定された。さらに中央土坑からはモモ核 11 点、サンショウ属種子 1 点がいずれも炭化して出土した（第４章第２節４）。

＜出土遺物＞

1240 は 1256 とともに北側の下段部床面で出土した。口縁部が鍬状に垂下する畿内系壺の口縁である。後期前半に属す。1241 は口縁部が大きく開き、端部が斜め下方に拡張して鋸歯文 A2 類を施す壺で、胎土中に黒雲母を多く含む胎土 H の土器である。埋土中出土で終末期に属す。1242 は胎土中に黒雲母を多く含み外面にベンガラの塗布を認める備中産の細頸壺胴部片である。上面精査で出土した後期前半の土器である。1243・1244・1246 は球胴から口縁が強く屈曲して外反する甕である。埋土中出土で終



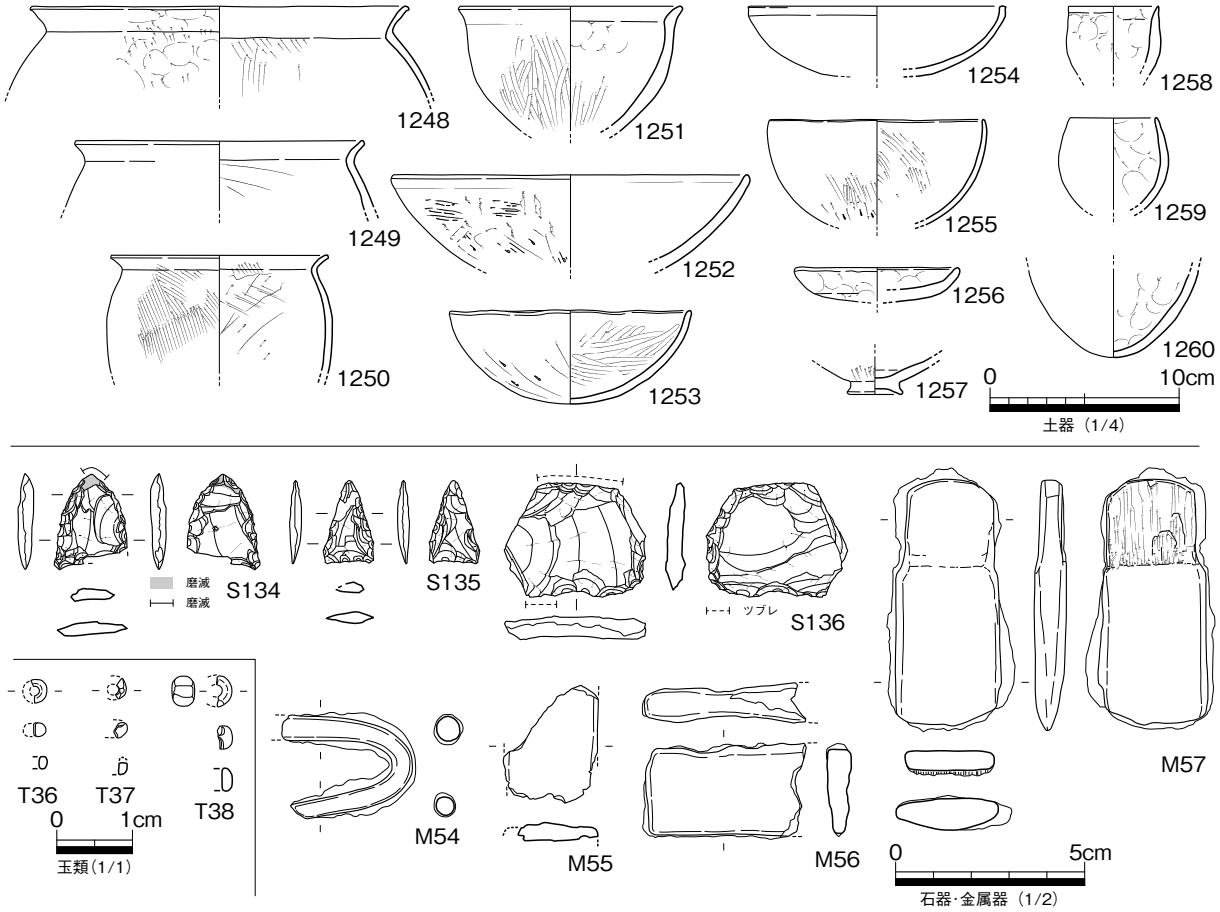
第 164 図　竪穴建物 SH4063a 平・断面図　出土遺物実測図 1

末期に属す。1245 はベッド状遺構北側の間仕切内側で出土した鉢で器壁が極端に薄い小壺の精製品である。1247 は埋土出土の胴長の小形甕である。1248 ～ 1250 は埋土出土の甕で、1248 は終末期に属す。1251 は口縁部外反の鉢で体部下半が直線的なことから後期後半、1252 ～ 1256 は中小の直口鉢で口縁端部を丸く収め丸底の形態から終末期新段階に属す。1257 は矮小化した台付鉢裾。1258 ～ 1260 は胴長で丸底の小形鉢である。なお 1241 以外に、1243、1244、1248 ～ 1250、1253 が胎土 H である。

S134 はサヌカイト製打製石鏃で調整加工後に先端を強く研磨する。当地域の伝統的な打製技術には見られない特徴で半磨製石鏃である。同様の特徴は本遺跡出土石鏃に稀に見ることができる。S135 は平基式のサヌカイト製打製石鏃である。S136 はサヌカイト製楔状石核である。これらの打製石器はいずれも埋土上層から出土しており、埋め戻しの際に混在したものといえる。

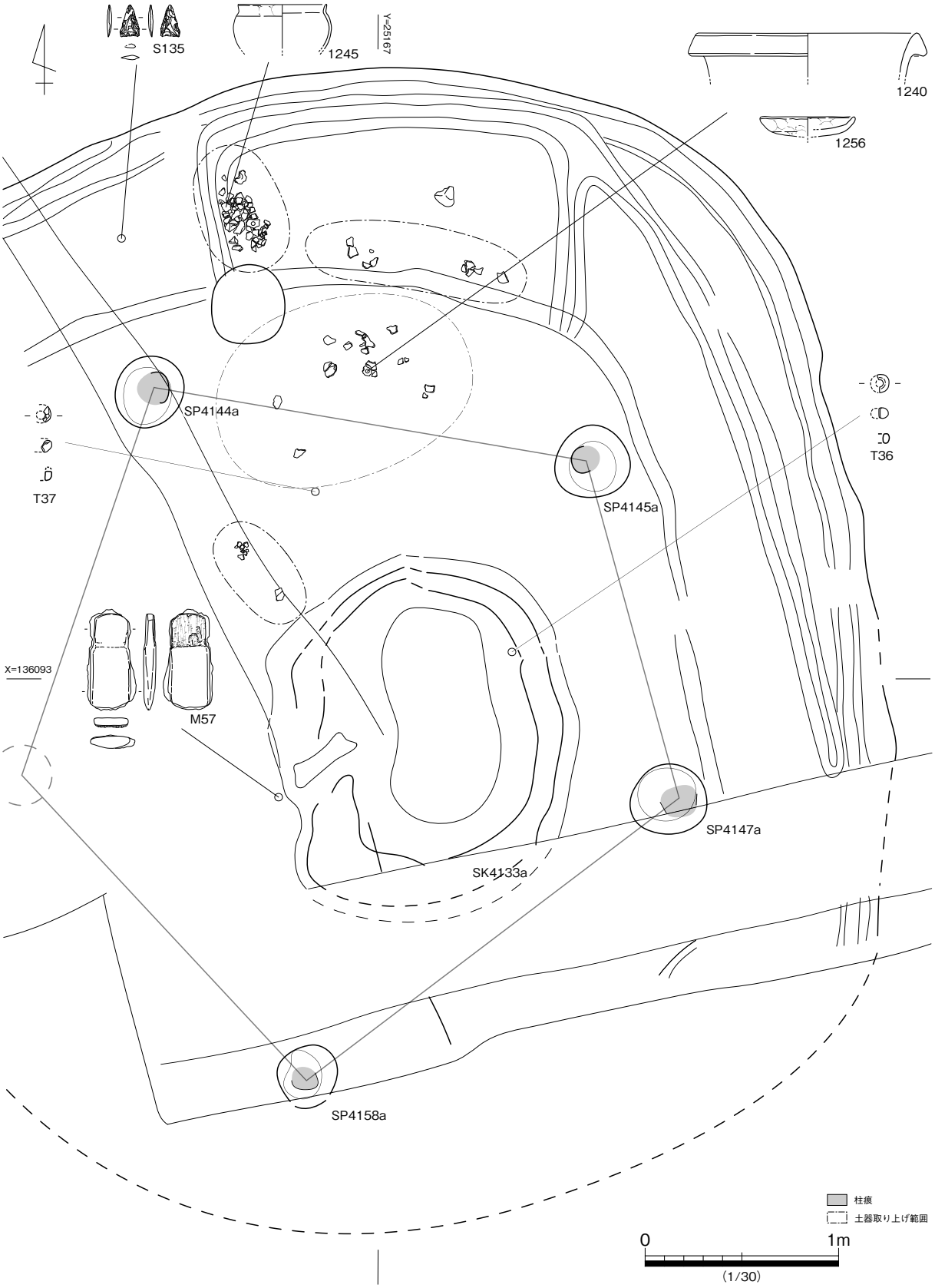
M54 は埋土出土の U 字形鉄片である。後世の混在品の可能性も捨てきれないが、出土位置は埋土の中位と記録されており、ここでは弥生時代遺物として取り扱う。M55・M56 は板状鉄片である。いずれも幅が 2.5cm で厚さは 0.5cm をやや超えるサイズである。M57 は身幅 2.7cm の短冊状の板状鉄斧で身部の厚みは 0.8cm、柄部の厚みは 0.5cm を測る。柄の上端は弧を描くように丁寧な端部処理が行われ、柄部には縦方向の木目を持つ木柄痕を認める。関は表裏面・側縁とも段を持つ。刃部は使用痕と思われる片減りがある。部分切断し、金属構造の分析を行い、舶載品の可能性が指摘されている（第 4 章第 5 節 3）。T36 ～ T38 はガラス製小玉である。いずれも破損し 3 ～ 5 割が残存する。色調は青緑色で酸化カリウムが多いカリガラス製である。床面あるいは貼床層で出土した。

遺構は掘方が深く残存しており、竪穴建物の内部構造を検討する材料が豊富である。出土遺物は後期



第 165 図　竪穴建物 SH4063a 出土遺物実測図 2

前半から終末期新段階まで幅広いが、廃絶時期は終末期新段階である。



第 166 図　竪穴建物 SH4063a 出土状況図

（72）SH4100a

4 区西側中央部で検出した竪穴建物である。南北にやや長い楕円形を呈し、後期前半新段階の SH4025a を切る。西側は中世溝に一部を壊される。推定床面積は 24.5㎡。

主柱穴は５基（SP4137a・SP4136a・SP4135a・SP4134a・SP4138a）で構成する。壁溝が 2 重に巡る。これは、主柱穴を維持したまま拡張建て替えを行っている可能性と、間仕切りを備えたベッド状遺構を有する可能性とがある。中央土坑は SK4142a、SK4140a・SK4125a の 3 基がある。断面記録では時間差が明瞭ではなく、同時に各遺構が存在した可能性がある。ベッド状遺構が南北で幅 0.5 m、東西で 0.2 m程度まで狭くなる歪な屋内高床構造である。前項の SH4063a 平面形が南北に長い楕円形で、床構造がやや特異であることも似ている。

中央土坑 SK4142a に含まれる炭化物 7.61g を分析し、コナラ属クヌギ節、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属の炭化材が同定された。また、炭化したモモ核９点が出土した（第４章第２節４）。

＜出土遺物＞

1261 は玉葱形の胴部に突帯２条を貼付しその間に棒状浮文３本を渡し､その左右に原体刺突文を回す。吉備系の細頸壺である。胎土は橙色系の在地胎土である。1262･1263 は肩が強く張る胴部に櫛描波状文･直線文を施す壺である。1264 は長頸壺頸部に突帯を貼付する壺である。これらの壺はいずれも後期前半に属す。

1265 ～ 1267 は口縁部が受口状となる備中・備後系の甕である。後期前半新段階。1268 は口縁部の拡張が矮小化した甕口縁部片である。1269 ～ 1271 は後期前半各期の鉢・高杯口縁部、1272 は裾端部の下方への拡張が顕著な備後系高杯脚部、1273 は胎土中に大粒の黒雲母と小粒の角閃石が多い備中南部産の高杯脚部である。いずれも後期前半に収まる。1274 は円盤充填の高杯である。

1275 は口縁部に細い凹線文を施す器台口縁部片。後期前半新段階までに収まる。1276 ～ 128 は平底の底部群である。底縁稜線はいずれも明瞭なものが多く、後期前半に収まる。1276 は胎土 H である。

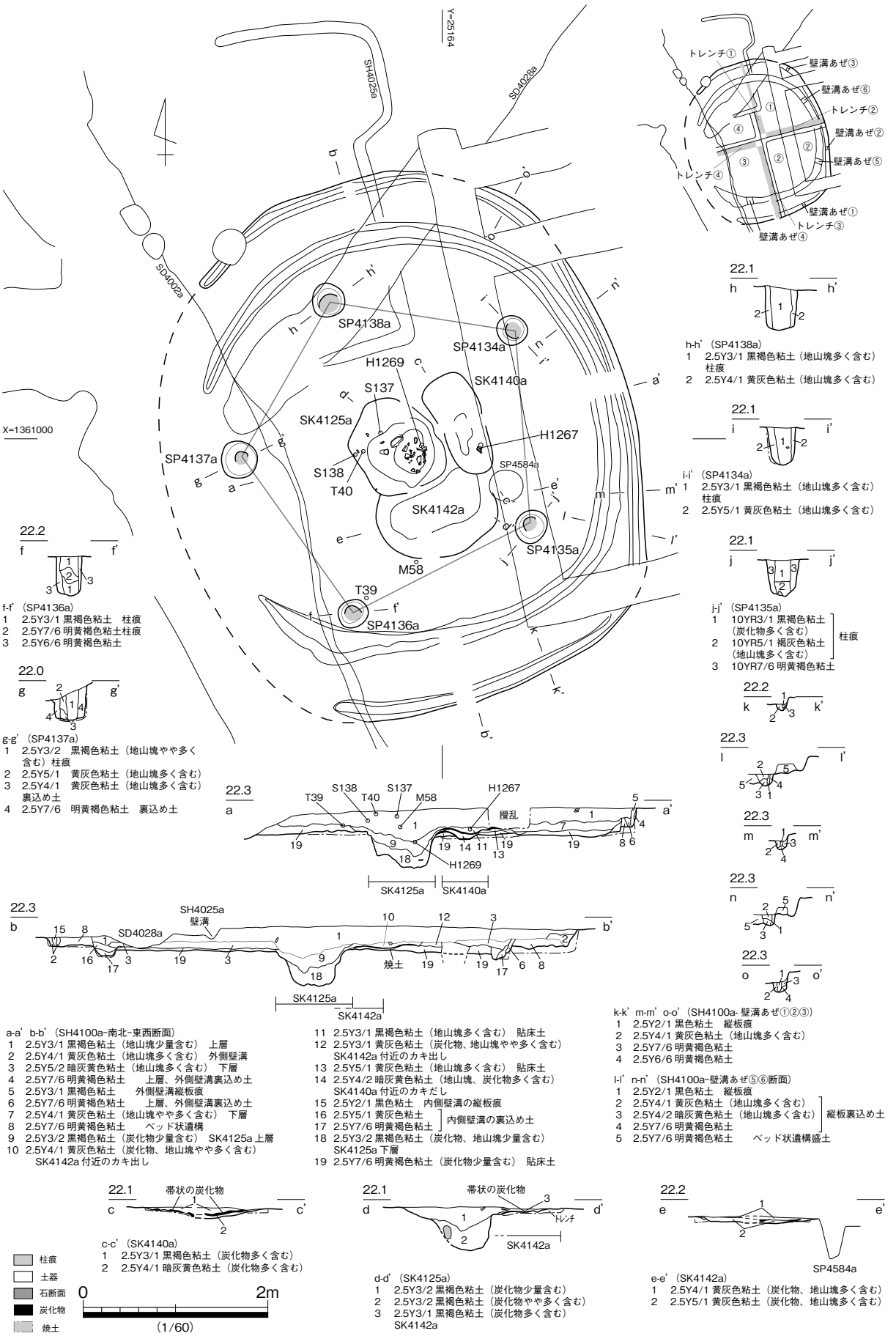
S137 ～ S140 はサヌカイト製打製石鏃である。いずれも凹基式で大小のサイズがある。S141 は打製石庖丁である。刃部は剥離面の凹凸に関わらず全体的に光沢のある摩滅を生じている。S142・143 は楔状石核である。

M58 は銅鏃である。刃側縁は石鏃のごとく二等辺三角形状に直線的で、連鋳から切り離し後に丁寧に研磨仕上げがなされたものと推察する。M59 は小形の板状鉄片で、M60 は鉄針の先端部片である。Ｘ線で確認すると下端が僅かに折損する。直径 0.9 ～ 1.0mm の作用部が長さ 10mm 以上ある形態である。中央土坑 SK4125a の土壌水洗中に検出した遺物である。

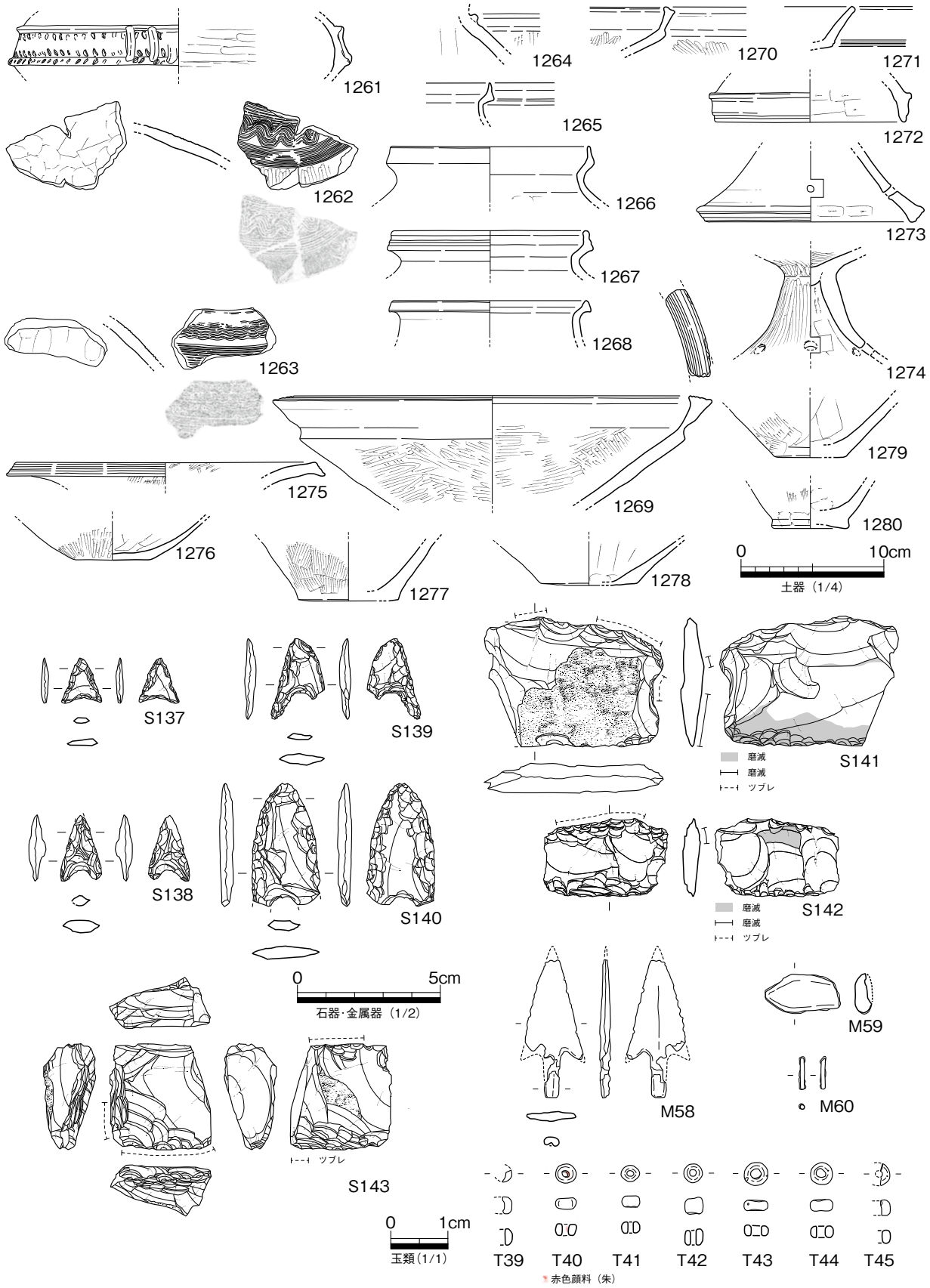
T39 ～ T45 はすべて透明感のある青緑色の酸化カリウムが多いカリガラス製の小玉である。いずれも床面若しくは中央土坑より出土したものである。そのうち、T40 の孔内には微量の赤色顔料が残存し、分析の結果朱と確認した。また、器面の気泡内にはベンガラ粒子が残存していた。（第 4 章第 6 節 7）同様にガラス小玉内に朱が残る例としては、旧練Ⅲの M 区出土の鉛ガラス製の小玉内面に遺存する朱が（分析番号 068）ある。

本建物は出土土器に後期前半新段階より新しい遺物は含まれておらず、本建物の廃絶時期は後期前半新段階に収まるものと考える。

出土品は銅鏃・鉄素材・ガラス玉と多彩である。



第 167 図　竪穴建物 SH4100a 平・断面図



第 168 図　竪穴建物 SH4100a 出土遺物実測図

（73）SH4108a

４区中央南端で検出した方形の竪穴建物である。張出付隅丸方形の竪穴建物 SH4124a を切る。南北 4.7 m、東西 4.0 mで四隅は若干丸みを残す。推定床面積は 18.1㎡。主柱穴は４基（SP4188a・SP4186a・SP4189a・SP4187a）で建物中心よりやや南側に偏って配置される。南側は柱穴位置、北側は柱穴位置より北に離れて貼床による幅 0.8 mのベッド状遺構を構築する。床面中央及び段下の南端に炉跡と推察する土坑が２基（SK4209a・SK4199a）存在する。いずれも浅く、埋土中に炭化物を多く含む。

床面出土遺物はほとんどなく、下層（断面２層～６層）出土の土器と、上層（１層中）に投棄された土器の２群に分かれ、後者が圧倒的に多い。下層は基盤土ブロックの混在等からみて一括して埋め戻された土層であり、上層はある程度の時間を経て廃棄場として機能した後に埋められた土層と推察する。

＜出土遺物＞

下層出土の土器は 1292・1295・1298・1302・1304・1308・1311・1321・1322・1315・1317・1334 である。1337 はベッド状遺構貼床内で出土した。

1281 は拡張した口縁端部に鋸歯文 A2 類を施文する広口壺で終末期新段階に属す。1282 ～ 1286 は口縁部が大きくラッパ状に開く広口壺で、球胴から頸部が屈曲して接続しさらに口縁部が屈曲して開き、端部を上下に僅かに拡張する。終末期新段階に属す。1288・1289 はそれらの頸部片で、1289 は胎土 H である。1287 は頸部がやや内傾し外面に沈線文を施し、さらに外表面にベンガラを塗布する壺である。1290 は体部が矮小化し口縁部が内彎して立ち上がる小形丸底壺である。形態から終末期新段階以降に位置づける。1291 ～ 1308 は新古があるが、1301 等寸胴化した胴部の甕が終末期新段階に下る。1309 ～ 1312 は口縁部が外反する大形鉢。1314 ～ 1317 は小形鉢。1318 ～ 1327 は皿状の中小の鉢である。口縁端部の面取りがほぼ消滅し、丸く収めるものが多い。1328 ～ 1337 は直口縁の鉢である。これも新古が混じる。1338 は台付鉢である。1340 は上部に円孔のある支脚である。

出土土器には胎土 H 及び胎土 Hb が多く含まれる。

S144 は側縁辺を敲打する叩き石である。M61 は木質に覆われた棒状鉄片である。鉄鏃茎とするには木質の木目が斜行するので適切ではない。M62 ～ M64 はいずれも棒状の鉄片である。M62 は上下端が折損しいずれも破断面が摩耗する。M63 は大部分折損。M64 は破断面が摩耗する。

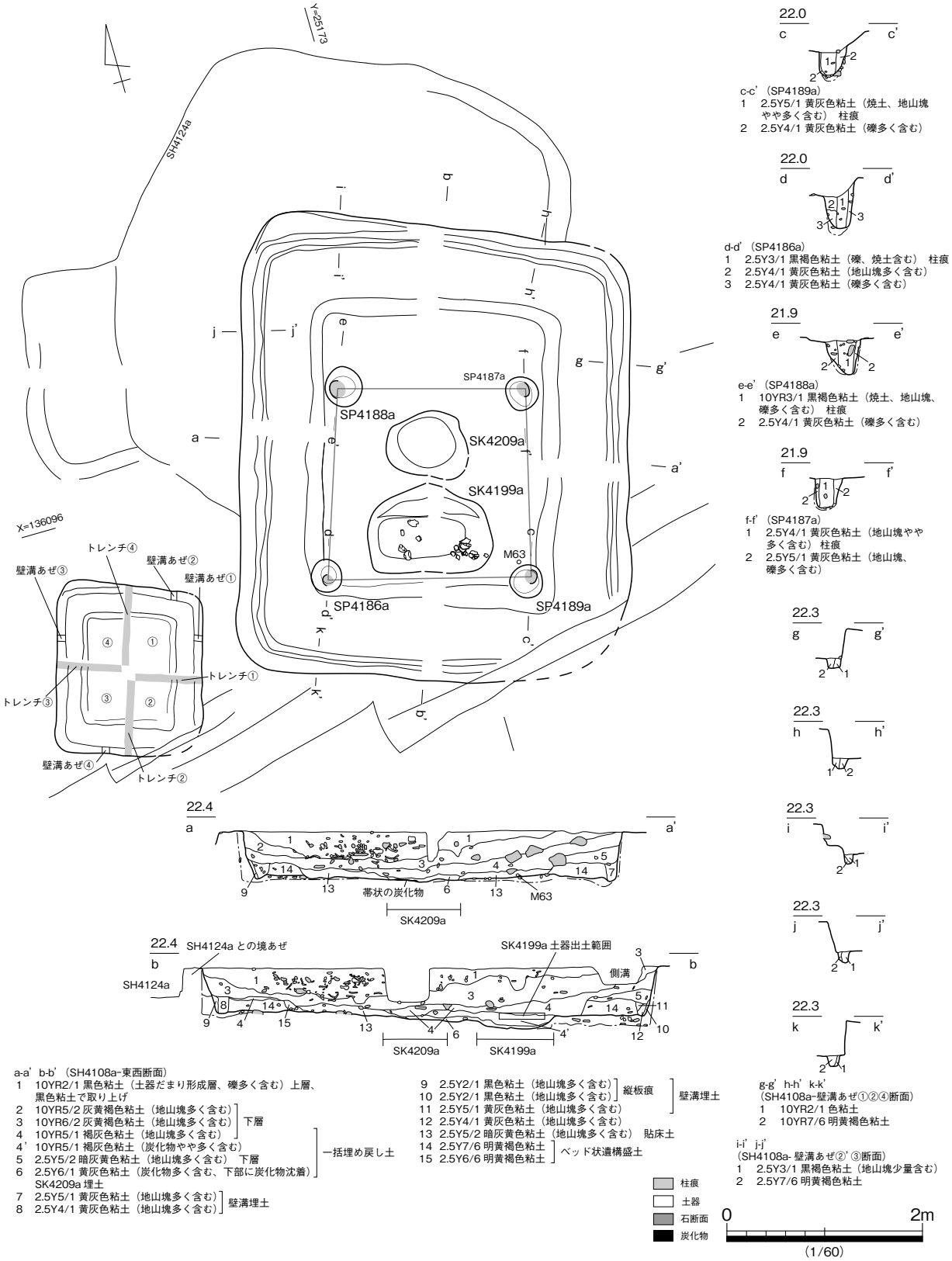
出土した土器は終末期新段階である。廃絶後の埋没土中から出土しているものも多いが、床面及び下層出土の遺物にも終末期新段階のものが多い。したがって本建物の廃絶時期は終末期新段階と判断した。

（74）SH4112a

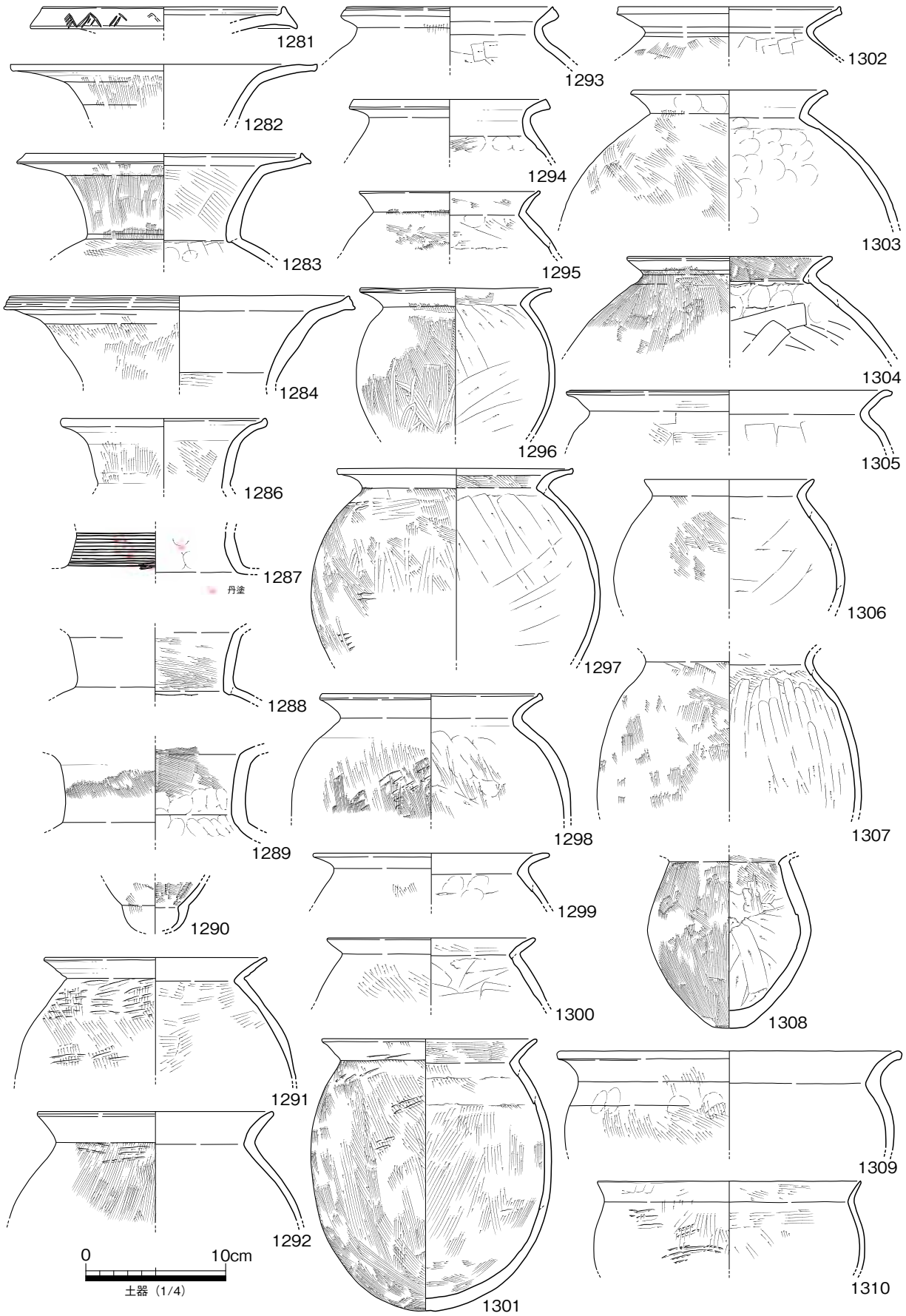
４区北西隅で検出した竪穴建物である。掘方の北と西は後世の撹乱や調査範囲から外れており、詳細は不明である。重複する竪穴建物はない。

主柱穴は４基で構成し、そのうち３基（SP4206b・SP4219b・SP4223b）を検出した。主柱穴列の外側に貼床によるベッド状遺構を構築する。下段部の南端に長楕円形の中央土坑があり、少量の炭化物が含まれる。炭化物は土坑より外側の床面で数か所の集中域がある。推定床面積は 17.5㎡。床面出土遺物は図示したように多数ある。

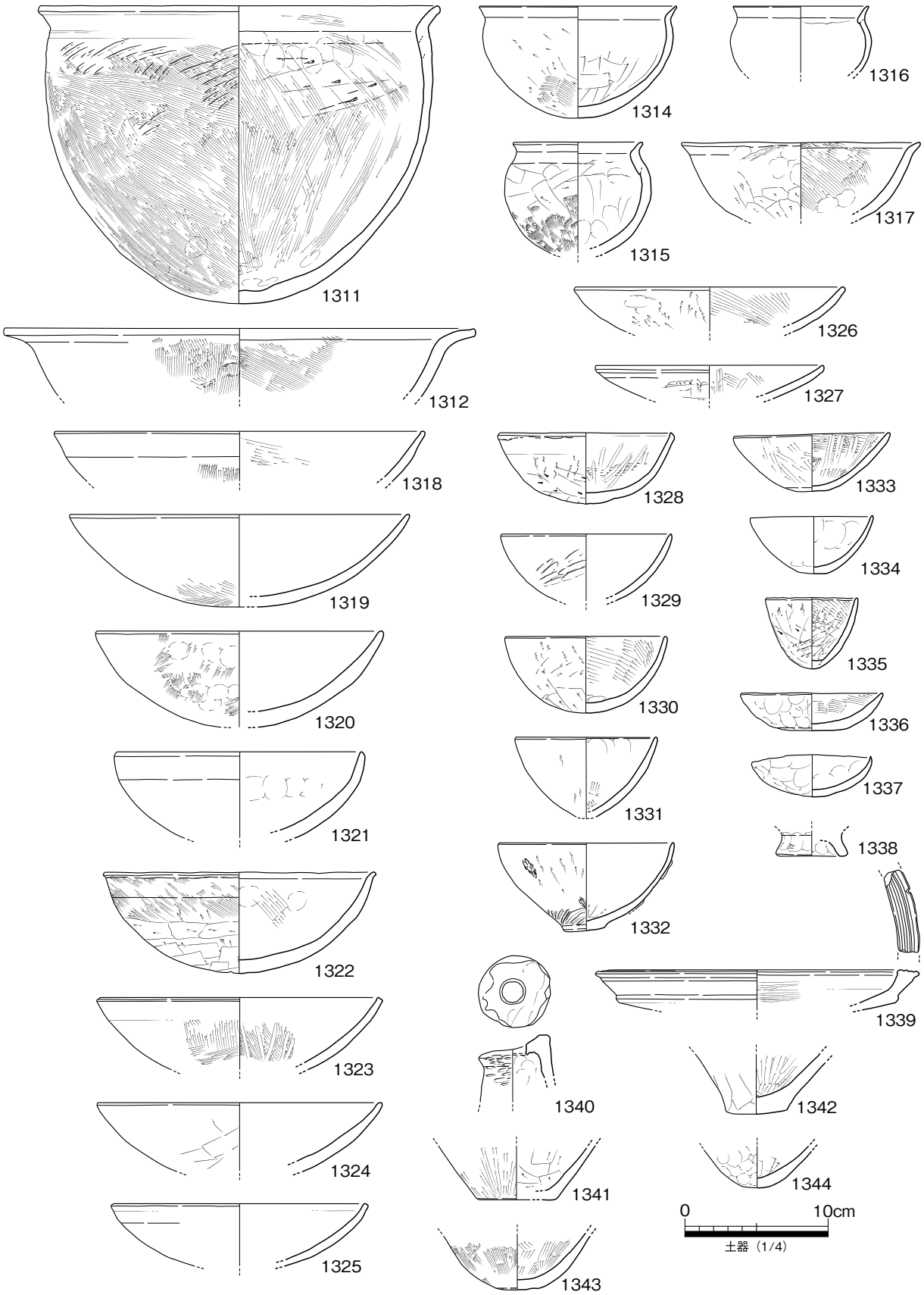
床面より下位には基盤土ブロックを多量に含む貼床層（第 173 図断面８層）が全面に敷かれ、その下位に図では赤色で示した間仕切溝が確認できた。下層で出土した遺物は安山岩製の大形の砥石１点のみで、時期がわかる土器は出土していない。



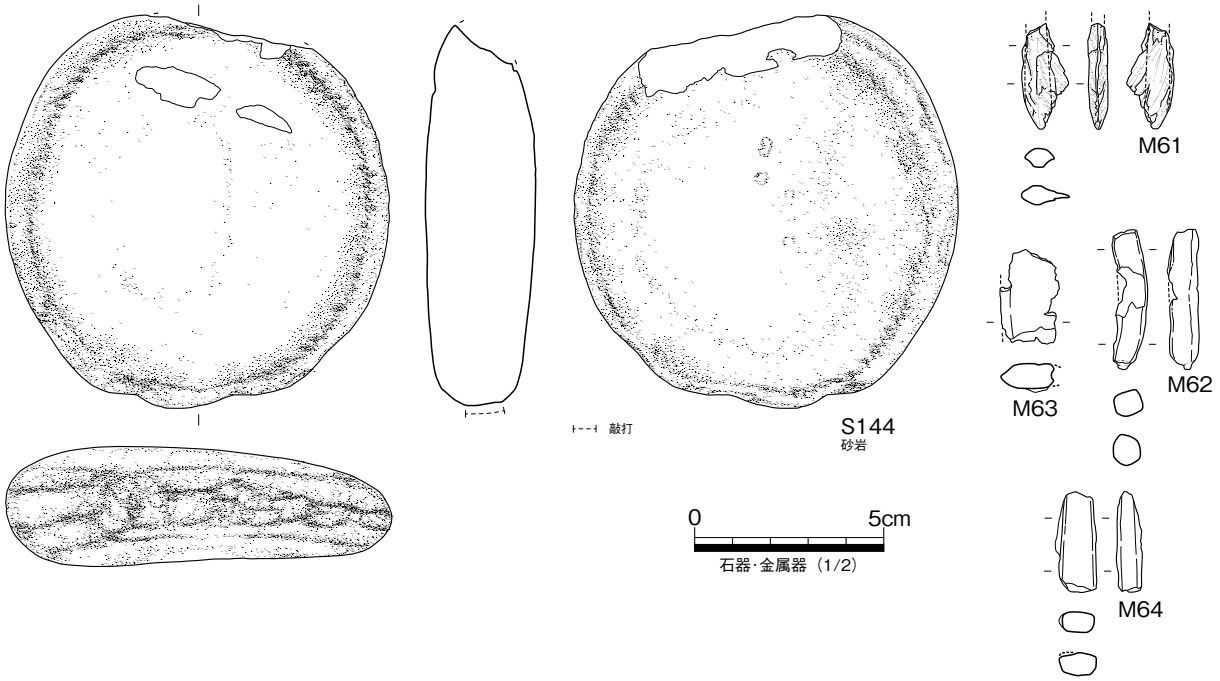
第 169 図　竪穴建物 SH4108a 平・断面図



第 170 図　竪穴建物 SH4108a 出土遺物実測図 1



第 171 図　竪穴建物 SH4108a 出土遺物実測図 2



第 172 図　竪穴建物 SH4108a 出土遺物実測図３

＜出土遺物＞

1345・1346・1348 は複合口縁の壺である。頸部から口縁部へは緩やかなカーブで接続する器形を呈し、前２者は A1 類の鋸歯文・竹管刺突文し、接合はしないが同一個体と思われる。1348 は複合口縁部が短く強く内傾し、器形は西部瀬戸内沿岸地域の影響下にあるが、黒雲母を多く含む胎土 H である。1351 は床面出土の丸底壺である。焼成後に底部を穿孔する。これらの壺は終末期に属す。

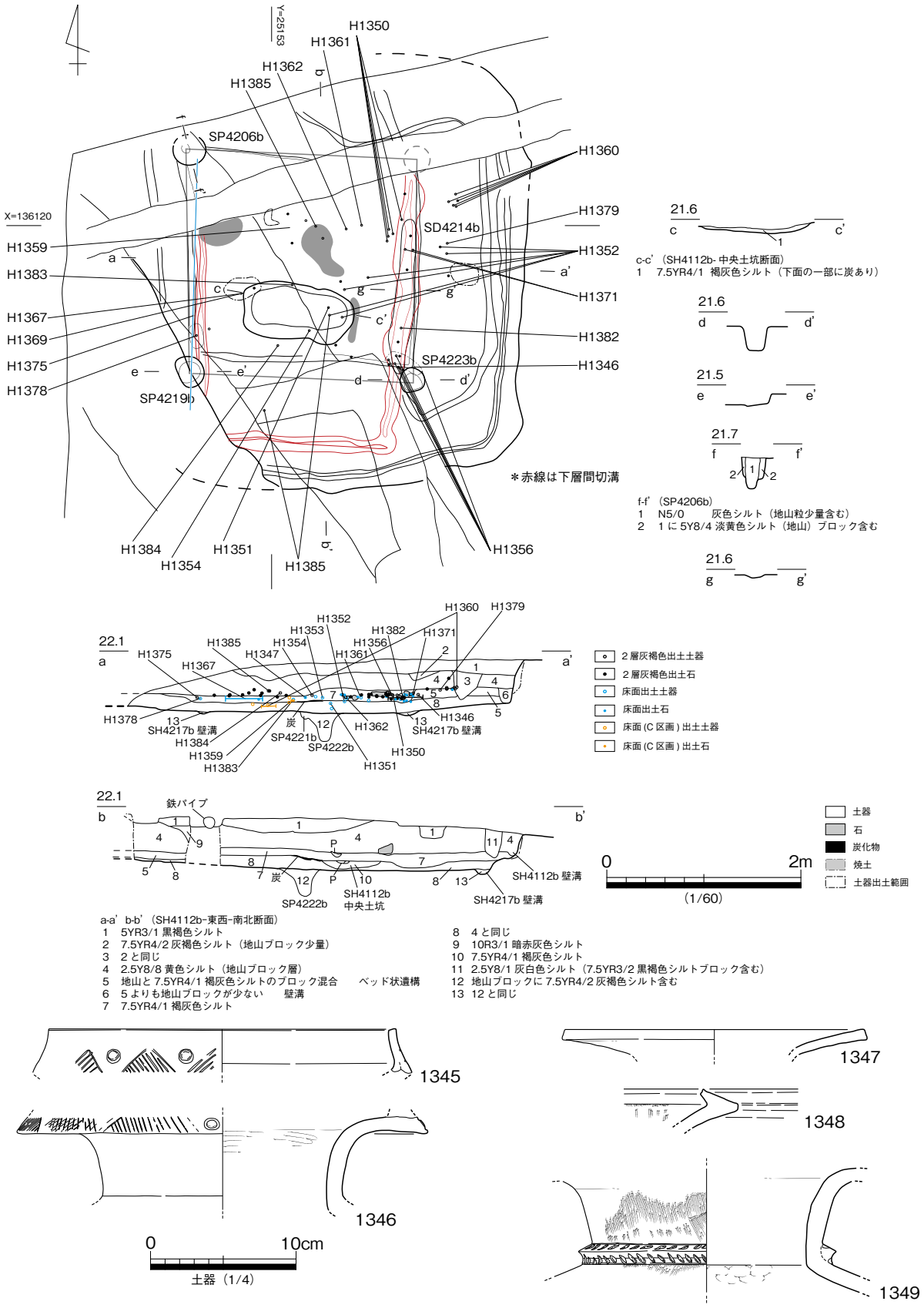
1352 ～ 1362 は甕である。1352 は外面に叩き目を残し、体部下半の器形はあまり膨らまず、直線的に底部に移行する。1353 は胎土 H で、1362 は胎土中に角閃石を多く含む高松平野産の下川津Ｂ類土器である。口縁内面稜線が鋭く、口縁は短く外反する形態で、終末期新段階まで下らない。1364 ～ 1378 の直口鉢は尖り底形態で、1379・1380 は小形の皿形鉢である。1379 は体部上半及び内面の器面を丁寧に仕上げており、手づくね手法による器面仕上げではない点で古い属性を残す。なお、1366 ～ 1368・1371・1379・1380 は胎土 H、1356・1357・1369 は胎土 Hb である。

1383 の器台や 1384 の支脚は後期後半以前の混在品で、1385 は体部下半の形態は後期後半でも古段階に属す特徴を残すものである。

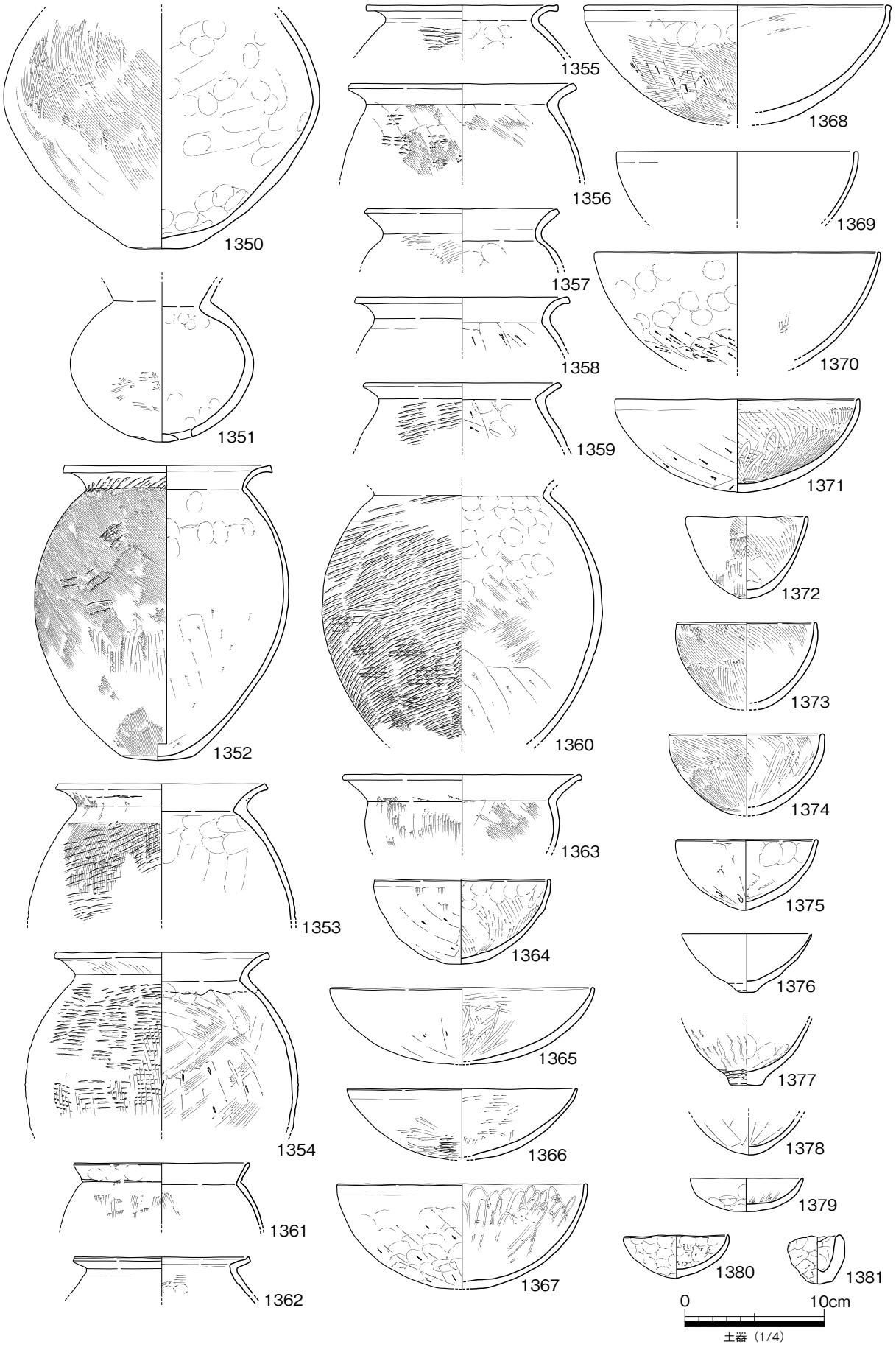
S145 はハリ質安山岩製の凹基式打製石鏃、146 はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。S147 はサヌカイト製打製石庖丁である。S148 ～ 150 は安山岩製砥石で S150 は下層住居出土である。研磨はいずれも軽度で＃ 1500 ～ 2000 の研磨度である。

本建物は出土土器から終末期古段階に廃絶した建物である。下層建物にあっては判断材料が少なく不明である。

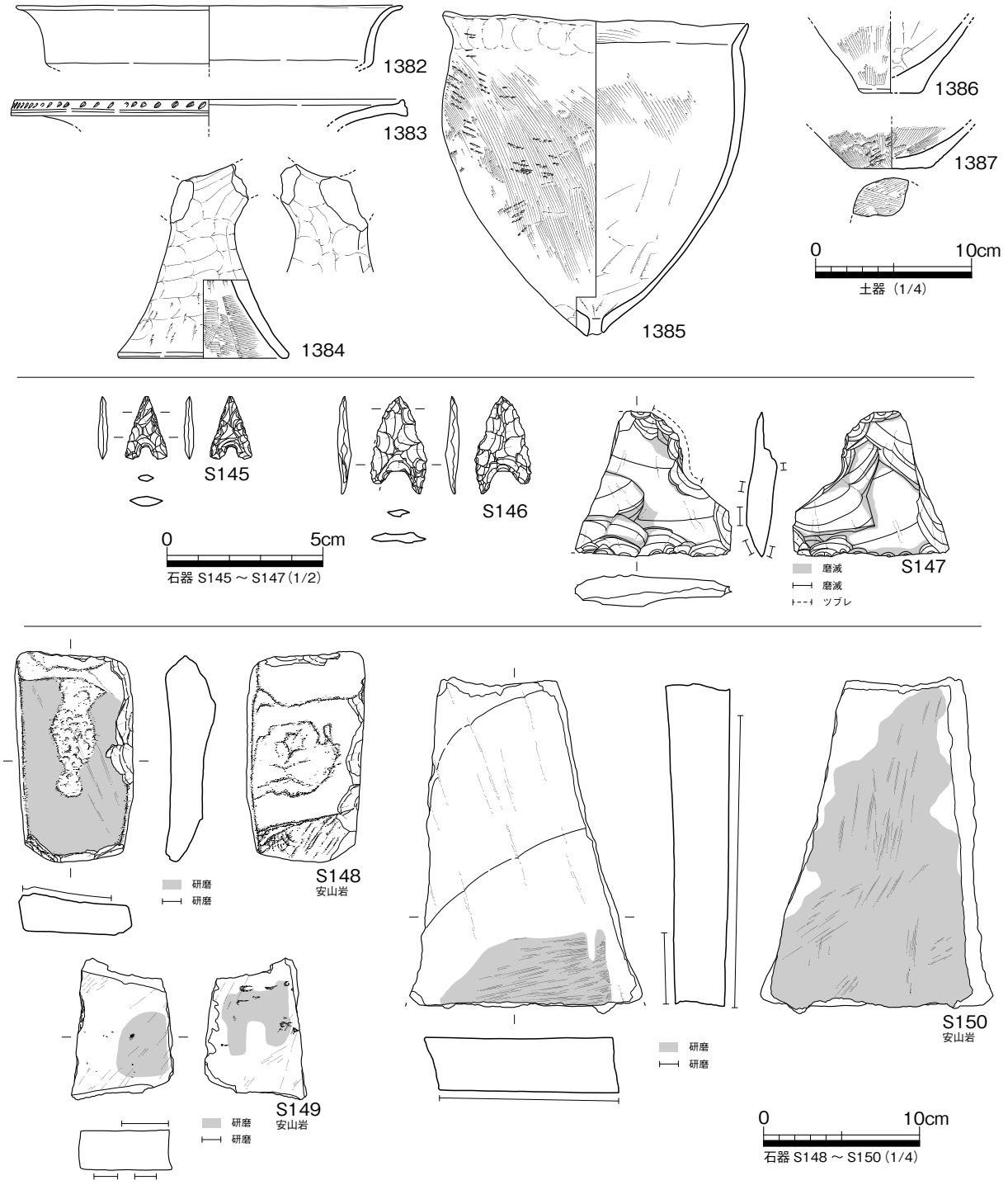
（75）SH4121b



第 173 図　竪穴建物 SH4112b 平・断面図　出土遺物実測図 1



第 174 図　竪穴建物 SH4112b 出土遺物実測図２

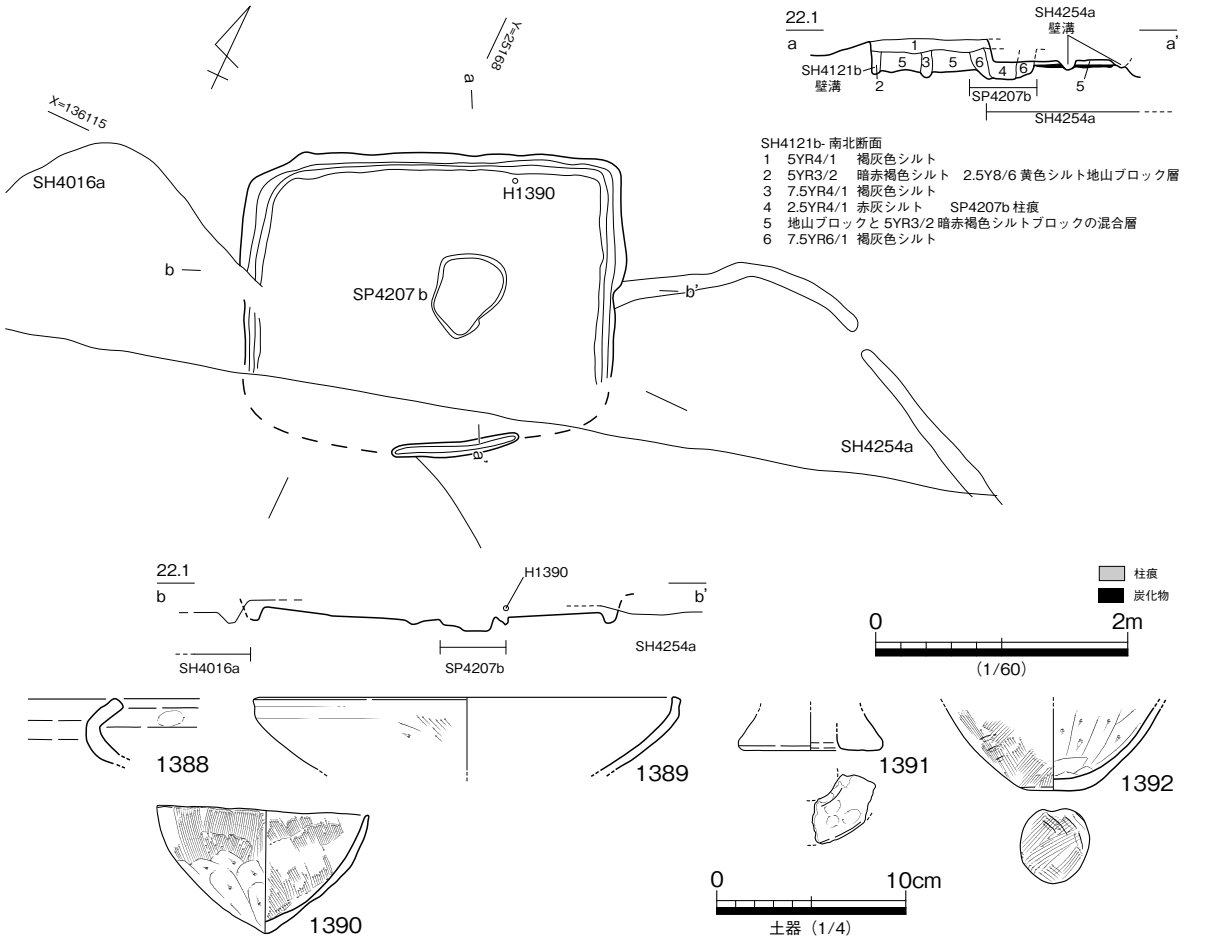


第 175 図　竪穴建物 SH4112b 出土遺物実測図 3

4 区北中央部で検出した方形の竪穴建物である。SH4016a・SH4254a・ST4122b に切られる。東西 3m、南北 2.4 m で中央付近に浅い土坑 SP4207b が付属する。床面積は 6.7㎡。

床面は貼床（断面 5 層）があり、土坑はその上面から掘り込まれる。土器は貼床層からも出土している。

1388 は後期後半の短頸の壺である。1389 は口縁端部を面取りし体部下半が直線的な器形を有する中形の皿状の鉢で、後期後半に属す。胎土 H。1390 は底部が直線的に窄まり尖り底を呈する後期後半の直口鉢。1391 は器壁のあつい支脚である。1392 は底縁部が丸みを帯びる平底の底部である。



第 176 図　竪穴建物 SH4121b 平・断面図　出土遺物実測図

これらの土器は後期後半新段階より新しい土器はなく、その時期が建物の廃絶時期と判断した。

（76）SH4124a

4 区中央南で検出した突出部付隅丸方形の竪穴建物である。終末期の竪穴建物 SH4108a に切られ、また北側の SD4203a は本建物の輪郭に平行して走行しており、関連性のある溝と判断した。さらに北東方向に流下する SD4535a も本建物突出部の先端ラインに平行してカーブする形状から、関連性を考慮する必要がある。

主柱穴は 4 基（SP4198a･SP4185a･SP4511a･SP4510a）で中央付近は SH4108 に切られて床面が滅失し、中央土坑の有無や形状は不明である。

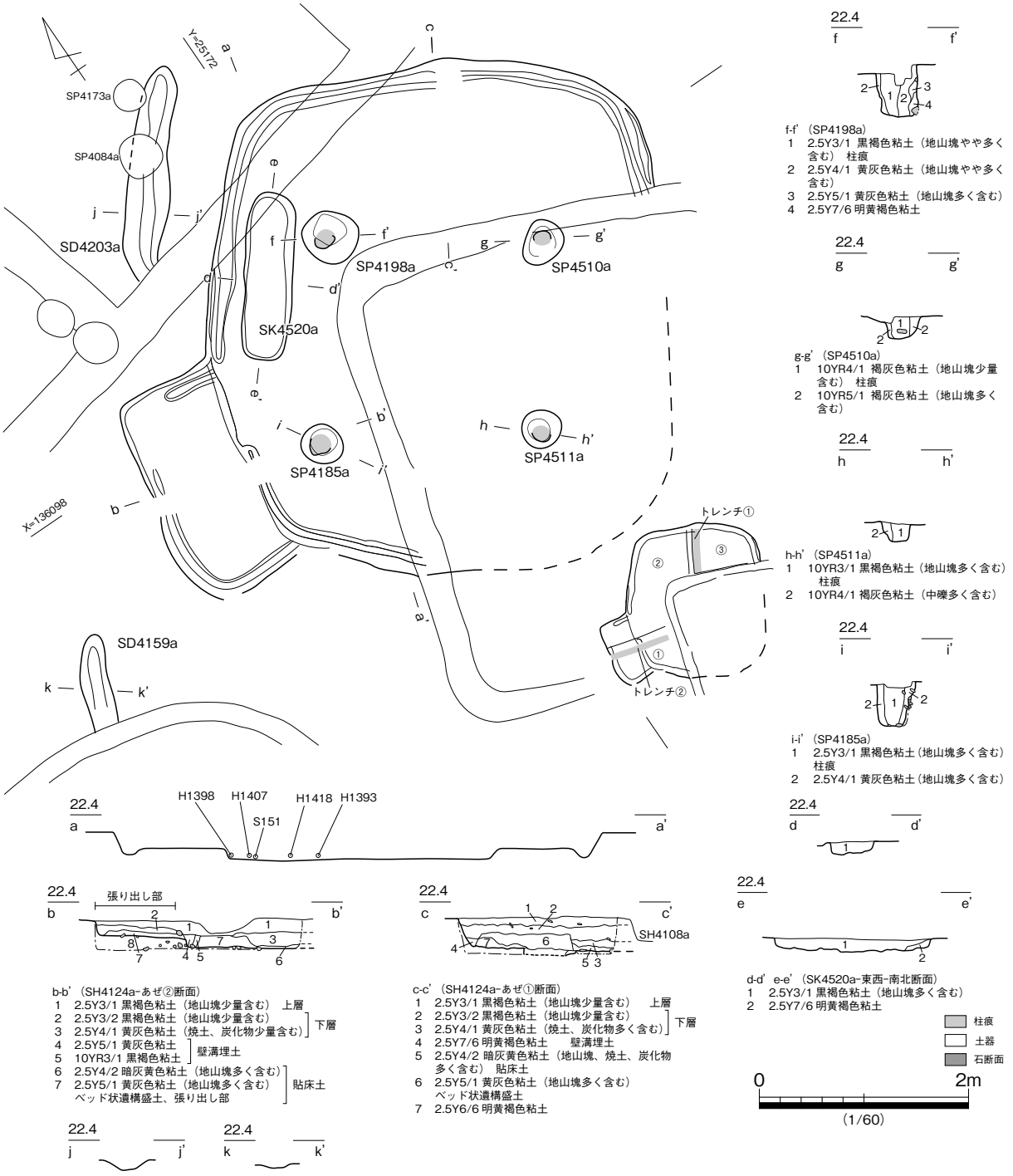
長辺 4.9 m、短辺 4.2 mで、西側隅で斜め方向に突出部が付属する。突出部は、建物掘削時に基盤層を床面より高く削り出すが、床面も高さ 0.15 mの貼床（b ライン 7 層・c ライン 6 層）によりほぼ高さを等しくしている。ただし、床面と突出部の間には間仕切板痕跡（b ライン 4 層）があり、扉等で仕切られた通常の床面とは異なる特別な空間である。突出部含めた推定床面積は 20.8㎡である。

床面北西側の壁面から 0.3 m離れ、それに平行して小規模な溝状の土坑 SK4520a がある。これは貼床下部に掘削された地盤固めのための土坑で、基盤土ブロックを含む土で埋め戻されている。

床面では炭化物・焼土が多数出土した。土器と混在しながら小片となって分布しており、建物廃絶時

の痕跡である。炭化物は垂木状に木目配列がみられることから、廃絶時に上屋を含めて廃棄物を焼却した可能性があろう。図示したグリッドに区分して炭化物等を取り上げ、分析したが、合計約 50 g の炭化物のほとんどをコナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節が占め、少量クリ・ケヤキが含まれる程度で、C2・D2 グリッドの垂木状炭化材付近ではすべてがクヌギかコナラで、焼土がまとまる C3 グリッド付近ではクリ・ケヤキを確認した。つまり、垂木に通有のクヌギ・コナラを使用し、燃料材としてクリ・ケヤキが使われたと判断した（第４章第２節４）。

＜出土遺物＞



第 177 図　竪穴建物 SH4124a 平・断面図